



平成28年度 玉川大学APシンポジウム

大学教育の質保証に 向けた取り組み

入口から出口を見据えて

大学教育再生加速プログラム(以下、AP)は、大学教育の質的転換の加速を促し、大学の人材養成機能の抜本的強化を図ることを目的に、平成26年度より文部科学省が「アクティブ・ラーニング(テーマⅠ)」、「学修成果の可視化(テーマⅡ)」、「入試改革・高大接続(テーマⅢ)」、「長期学外学修プログラム(ギャップイヤー)(テーマⅣ)」のテーマで募集したものです。平成28年度には、新たにテーマⅤとして「卒業時における質保証の取組の強化」が加わり、テーマⅠ～ⅤはAPにおける「高大接続改革推進事業」として位置付けられました。

この背景には、各大学が入口(入学)から出口(卒業)まで質保証を伴った大学教育を実現し、テーマ間の連携を緊密化した総合的な取組を一層強力に推進していくことへの期待が込められています。

本シンポジウムでは、上記テーマⅢの追手門学院大学、テーマⅠ・Ⅱ複合型の玉川大学、テーマⅤの茨城大学の取り組みを報告し、さらにパネルディスカッションで広い視野からの議論を行います。3大学の取り組みを俯瞰し、学生の学修行動や学修成果をエンrollment・マネジメントの観点から捉えることにより、各大学の教育改革に資することを期待しています。

日時

2017年 **3月24日** 金
14:00～17:00(受付 13:00～)

先着限定

130名

入場無料

会場 玉川大学 大学教育棟 2014 612教室

対象 大学・短期大学の教職員およびその関係者

主催: ①玉川大学

お問い合わせ: 玉川大学教学部 教育学修支援課(担当 山崎・三ヶ田)

〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1

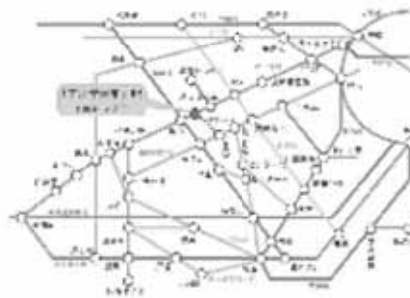
TEL: 042-739-8866 E-mail: il-supports@tamagawa.ac.jp

プログラム

- 14:00 開会
- 14:05 開催の挨拶 玉川大学 学長 小原芳明
- 14:15 事例報告①「選抜型」入試から「育成型」入試への必要性
-アサーティブプログラムとアサーティブ入試-
追手門学院大学 入試課長・アサーティブオフィサー 志村知美
- 14:45 事例報告②「アクティブ・ラーニングの実践と学修成果の可視化に向けた取り組み」
玉川大学 教学部長 稲葉真己
- 15:15 事例報告③「茨城大学における教育の質保証 -卒業時の質を担保するための仕組みづくり-」
茨城大学 全学教育機構 准教授 葛田敏行
- 15:45 ----- 休憩 -----
- 16:00 パネルディスカッション
司 会:玉川大学 教育学部 准教授 小島佐恵子
登壇者:志村知美(追手門学院大学) 葛田敏行(茨城大学) 稲葉真己(玉川大学)
- 16:55 閉会の挨拶 学校法人玉川学園 理事 菊池重雄
- 17:00 閉会

会場アクセス [玉川大学 大学教育棟 2014 612教室]

- *新宿より(約30分)
小田急線「新百合ヶ丘」駅にて(各駅停車)(準急)に乗り換えて、
「玉川学園前」駅下車
- *小田原より(約60分)
「町田」駅にて(各駅停車)(準急)に乗り換えて、
「玉川学園前」駅下車
- 「玉川学園前」駅 北口より、新宿方面へ進み、徒歩約3分



シンポジウム参加お申し込み方法・お問い合わせ先

参加をご希望の方は電子メールにて下記項目を記載の上、お申し込みください。

- ①氏名(フリガナ) ②所属 ③職名 ④職種(教員・職員・学生・その他) ⑤メールアドレス ⑥電話番号
メールタイトルを「APシンポジウム参加申し込み」としてください

※メールアドレス tamasympo@tamagawa.ac.jp

※お申し込みの際にお知らせいただきました個人情報は、シンポジウムの集計およびご案内を目的とした運営のための利用以外には一切使用いたしません。

玉川大学教育学部教育学修支援課(担当 山崎・三ヶ田)

〒194-8610 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL: 042-739-8866

E-mail: il-supports@tamagawa.ac.jp

2017年
3月16日(木)
締め切り

2017年3月24日（金）
平成28年度APシンポジウム
「大学教育の質保証に向けた取り組み—入口から出口を見据えて」
於：玉川大学 大学教育棟 2014 612教室

事例報告
「選抜型」入試から「育成型」入試への必要性
～アサーティブプログラムとアサーティブ入試～

追手門学院大学
アサーティブ課
志村 知美
Tomomi.Shimura.py@otemon.ac.jp

お話の内容

1. 学校法人 追手門学院の概要
2. 追手門学院大学入試改革
3. アサーティブプログラムとアサーティブ入試
4. 最後に

2

1. 学校法人 追手門学院の概要

1888年（明治21年）

設立当初（銀行社小学校）



2017年（平成29年）



追手門学院小学校



追手門学院
中・高等学校



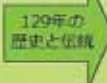
追手門学院幼稚園
幼保連携型認定こども園



創設者
高島穂之助



1966年 大学開学



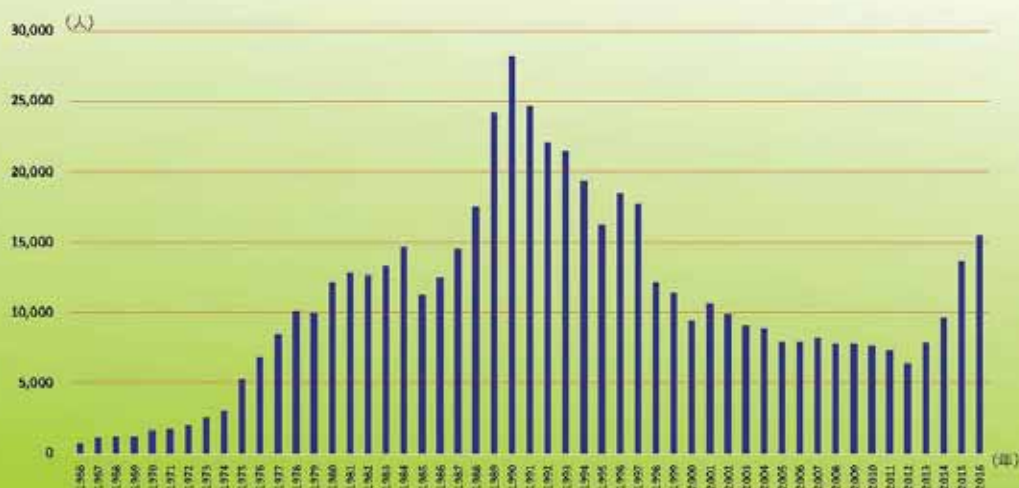
追手門学院大学・大学院



追手門学院
大学前中・高等学校

3

1-1. 大学志願者数の推移



4

2. 追手門学院大学入試改革



なんとなく	ツチノコ?	期待なし
不本意	学位を買う?	三者面談



5

2-1. 入試改革の目的

<この大学に入学してよかったと思う学生を増やしたい>

◆ 2013年4月から制度設計の本格始動



2014年4月スタート

6

2-2. 新しい入試制度の誕生

受験者像

1. 追手門学院大学で学びたいという気持ちを描き、その思いを伝えられる人。
2. 今は確かな希望や理念がなくとも、知的な事柄への興味や活動を通じ、何のために学ぶのかを問い続け、努力する人。
3. 高校までの基礎的な知識や技能の習得を見直し、向上しようと努力する人。

入学予定者像

1. シラバスの活用
2. 講義への参加意欲の向上
3. 各種活動への積極的参加



平成26年度大学教育再生加速プログラム
テーマⅢ「入試改革」に採択
(採択大学は、追手門学院大学・お茶の水女子大学・岡山大学の3大学)

7

3. アサーティブプログラムとアサーティブ入試

<アサーティブプログラムの必要性>

1. 受験者像に育てる場所が必要（高校1～3年生を対象）
2. 入試の概念では取まらない
3. 高校生と話したい
4. SDの効果



【アサーティブの意味】
相手の意見に耳を傾けながら、自分の意見や考えを主張することができる態度。
すなわち自分を知り、表現することが大切になると解釈

8

3-1. アサーティブプログラム

1. ガイダンスと本学職員との「個別面談」

オープンキャンパスも含めて年10数回のガイダンスとその際の個別面談。本学の専任職員が担当。自分を知り、大学で何を学びたいかを問い、自ら気づくように促す。この面談は、本学への受験を促すことはせず、本人の将来と一緒に考えるというスタンスで行っている。

2. 本学独自開発のシステム

基礎学力の確認と向上、計画的学習を習慣づけると同時に、追手門学院大学バカロレアで、多様な観点から考察する力を育て、自分の意見を述べる力や他者の意見を受容する姿勢を養おうとするシステム。

『MANABOSS (マナボス)』 <http://www.manaboss.com/>

3. 自己成長を促す「アサーティブノート」

このプログラムの結果を記録し、振り返ることで自己成長を促す。自分自身を主語にして記述する。

9

3-2. アサーティブ入試

<アサーティブプログラムの力を発揮する場所として設計>

◆ 1次試験（グループディスカッションと基礎学力適性検査）

- ・グループディスカッションは、1グループ5～6名で約30分の議論。
- ・主体性や協調性、論理性等を評価して合格を判定（職員2名による判定）。
- ・基礎学力適性検査は、MANABOSS搭載問題と同様の形式で出題。（60分40問で国語と数学）
- ・それぞれが一定水準以上かどうか総合的に評価して合格を判定。

◆ 2次試験（個別面接）

- ・教員と職員がペアとなり、志望理由や学問に対する意欲や知的関心のレベル等を評価し判定。

10

3-3. アサーティブ入試結果

		2015年度	2016年度	2017年度
面談者総数 (1～3年生)	実人数	190	557	751
	リピーター	31	155	163
	延人数	221	710	906
受験対象者(3年生)		185	538	717
アサーティブ入試募集人員		60	111	216
出願者	A日程	91	203	261
	B日程	—	87	134
合計		91	290	395
1次合格者	A日程	80	188	144
	B日程	—	72	69
合計		80	260	213
2次合格者	A日程	53	89	130
	B日程	—	41	60
入学者		53	130	190

11

4. 最後に

- ◆ 平成30年度には、入学定員数の3割をアサーティブで
- ◆ MANABOSSの充実・面談職員の増員と研修
- ◆ 高等学校との新たな協働関係の構築
- ◆ 他大学とのコンテンツの共同開発
- ◆ アサーティブ研究センターの研究開発の設立（2015年6月）

「学生の学びと成長のプロセスの可視化」ヘネッセ教育総合研究所との協同研究（2016年4月～）

12

玉川大学APシンポジウム 2017/3/24



アクティブ・ラーニングの実践と 学修成果の可視化に向けた取り組み

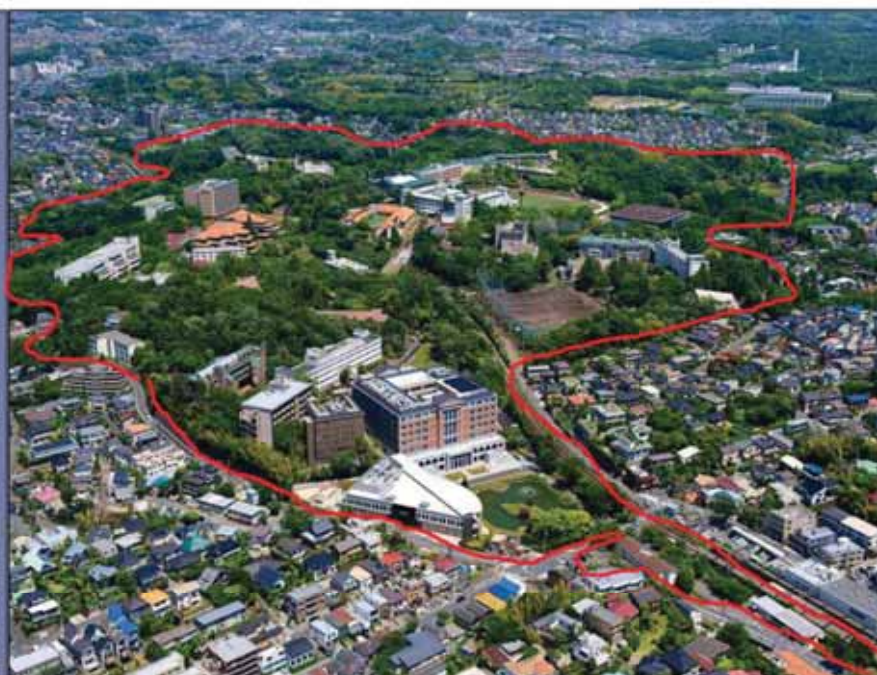
玉川大学 教学部長 稲葉興己

はじめに

校地面積：
約61万㎡
(学外校地を除く)
学生・生徒数：
13,012人
教職員数：
1,629人
2016年7月1日現在

文学部
農学部
工学部
経営学部
教育学部
芸術学部
リベラルアーツ学部
観光学部

文学研究科
農学研究科
工学研究科
マネジメント研究科
教育学研究科
脳科学研究科



Outline

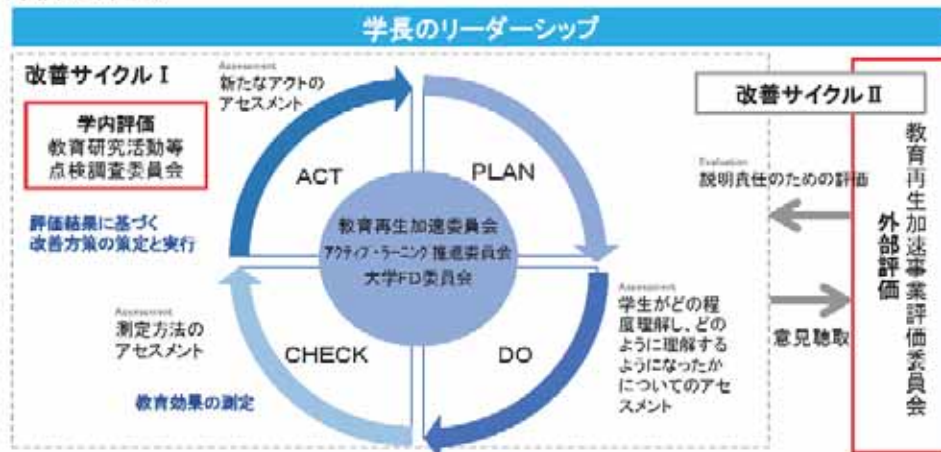
1. 本学の取り組みの概要
2. アクティブ・ラーニングの推進
3. 学修成果の可視化
4. 課題

テーマⅠ・テーマⅡの複合型（平成26年度採択）

- アクティブ・ラーニングの推進と体系化
 - アクティブ・ラーニング科目の体系化
 - アクティブ・ラーニング事例集の作成
 - ルーブリックの活用推進
- 教員の教育力養成
 - 全員参加型のFDプログラム
 - アクティブ・ラーニング、ルーブリック・ワークショップ等の開催
 - ティーチング・ポートフォリオの活用と教員評価
- 学修プロセス・成果の可視化
 - 学生ポートフォリオの活用
 - 学生調査・卒業生調査の実施

本事業の実施・推進体制

学長のリーダーシップのもと、教育再生加速委員会を中心に大学FD委員会と連携を図りながら事業計画の策定を行い、アクティブ・ラーニング推進委員会が事業計画を実施する。実施した内容は、教育研究活動等点検調査委員会（学内）および教育再生加速事業評価委員会（外部）において評価を行う。



▶ 5

Tamagawa University

平成28年度実施計画

- ① アクティブ・ラーニング・ワークショップの開催
- ② ループリック・ワークショップの開催
- ③ アクティブ・ラーニングに関する教員アンケート調査の実施
- ④ ティーチング・ポートフォリオ・ワークショップの開催
- ⑤ 卒業生アンケート調査の実施
- ⑥ ジェネリック・スキル測定テストの実施
- ⑦ 日本語プレースメントテストの実施
- ⑧ アクティブ・ラーニング事例集の刊行
- ⑨ 学修成果の確認と指導
- ⑩ シンポジウムの開催と報告書の発行
- ⑪ 外部評価の実施

▶ 6

Tamagawa University

Outline

1. 本学の取り組みの概要
2. アクティブ・ラーニングの推進
3. 学修成果の可視化
4. 今後の展望

アクティブ・ラーニング・ワークショップ

■ 目的

- アクティブ・ラーニングの実施促進と強化に向け、学内の全教員を対象とした「アクティブ・ラーニング・ワークショップ」を開催する。

■ 内容

- 平成29年2月24日（金）に学内研修会「大学教育力研修」を開催した。当日の内容は以下のとおりである。
 - 基調講演 「アクティブ・ラーニングの実践と課題」
 - 講師：愛媛大学 教授 中井俊樹

アクティブ・ラーニング・ワークショップ

- 分科会① アクティブ・ラーニング・ワークショップ
 - 「学生の学修を促進させる教育評価」
 - 講師：愛媛大学 教授 中井俊樹
- 分科会② ループリック・ワークショップ
 - 「ループリック評価スタートアップ～評価の原則から組織での活用まで」
 - 講師：高知大学 講師 俣野秀典
- 分科会③ コンテンツ授業英語化ワークショップ
 - 「授業英語化のための具体案づくり : CLIL (Content & Language Integrated Learning) を足がかりに」
 - 講師：福岡女子大学 准教授 和栗百恵

アクティブ・ラーニング・ワークショップ

- 分科会④ 学修支援ワークショップ
 - 「学修支援担当者に必要なスキルとは？」
 - 講師：愛媛大学 講師 清水栄子
- 分科会⑤ アクティブ・ラーニング事例報告
 - (文学部・リベラルアーツ学部)
- 分科会⑥ アクティブ・ラーニング事例報告
 - (農学部・工学部)
- 分科会⑦ アクティブ・ラーニング事例報告
 - (経営学部・観光学部)
- 分科会⑧ アクティブ・ラーニング事例報告
 - (教育学部・芸術学部)

アクティブ・ラーニング・ワークショップ

■ 成果（今後の展開を含む）

- 研修会には、154名の教員が出席した。参加者アンケートによると、全プログラムを通して87.4%の教員が内容について「とても充実していた」「充実していた」と回答している。
- 基調講演については、「講義＝悪い授業、アクティブ・ラーニング＝よい授業というわけではないことが確認できた。」「自分の授業設計を再考し、改善する機会となった。」「アクティブ・ラーニングとは何かという教科書的な内容ではなく、実践的な内容が教員の関心に合致していた。」「何度もこのような研修を実施して、教員が目標を確認しながら改善を推進することが重要。」という感想があり、アクティブ・ラーニングの活用に積極性は持ちながらも疑問を感じながら取り組んできた状況が垣間見えた。

アクティブ・ラーニング・ワークショップ

- 分科会においては、いずれも新しい知見に触れると同時に自らの取り組みを振り返る機会となり、授業に活用したいという感想が多かった。



ループリック・ワークショップ

■ 目的

- ループリック指標を成績評価に採用することで成績基準が明確になると同時に、学生の学修状況の把握が可能となり、客観的な個別指導に役立てることができる。そのために、ループリック指標の作成と使用方法に関するワークショップを開催する。

■ 内容

- ループリック・ワークショップ「ループリック評価スタートアップ～評価の原則から組織での活用まで」を2回開催した。1回目は10月21日、2回目は2月24日 本学学内研修会「大学教育力研修」の分科会の一つとして開催した。いずれも同じ内容である。

ループリック・ワークショップ

■ 成果（今後の展開を含む）

- 10月21日開催においては25名、2月24日開催においては48名が参加した。
- 内容は、これからループリック指標をもとにした成績評価に取り組むためにはどのようなにしたらよいのかということを中心にしたものであった。参加者からは、「どのように活用できるかという具体的なイメージ喚起まで含めた啓発をしていただいたので何とか使えそうだという感触を得ることができた。」「授業の活性化にも役立てられる。」などの感想が寄せられ、今後の活用が期待される。



アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査

■ 目的

- 本学におけるアクティブ・ラーニング導入促進の取り組みが、どのような効果を及ぼしているかを、定期的に測定するためのアンケート調査として実施する。また、平成27年度からは、教員による共同研究グループと連携して内容を見直し、科目ごとにどのような形態のアクティブ・ラーニングを実施しているか、またそれを通じてどのような効果が感じられたかを把握する方法に変更した。今後は、その内容を分析することで、アクティブ・ラーニング体系化のための基礎データとしていく。

アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査

■ 内容

- 平成25年度（AP採択前）、平成26年度、平成27年度の各年度末に、学士課程開講科目を担当する全専任教員・全非常勤講師にアンケート調査を実施した。調査内容は、アクティブ・ラーニングの形態別の実施状況およびそれに伴う学生の学修行動や態度の変化である。
- 平成27年度以降の調査においては、アクティブ・ラーニングの定義が回答する教員に伝わりにくいという反省を踏まえ、質問紙の構成や表現を学部間共同研究における検討により改めた。従来の「アクティブ・ラーニング」を「学生の能動的な学修への取り組みを意図した授業の手法や工夫」とし、さらに具体的な説明を加えている。科目ごとにアクティブ・ラーニングの実施形態と手応えを関連付けて確認することで、今後のアクティブ・ラーニングの体系化に活かせるものとなっている。

アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査

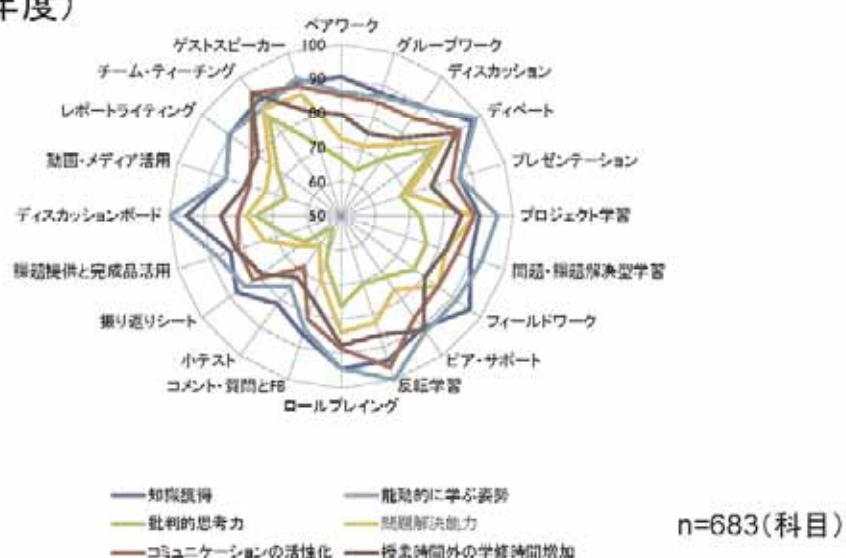
■ 調査結果

- 平成25年度から平成27年度におけるアクティブ・ラーニング実施状況 (%)

	全開講科目における実施割合	必修科目における実施科目割合	全学生における受講学生の割合	専任教員における実施教員割合
平成25年度	23.9	14.3	46.6	39.2
平成26年度	32.0	10.8	93.4	40.9
平成27年度	29.0	38.8	95.3	64.9

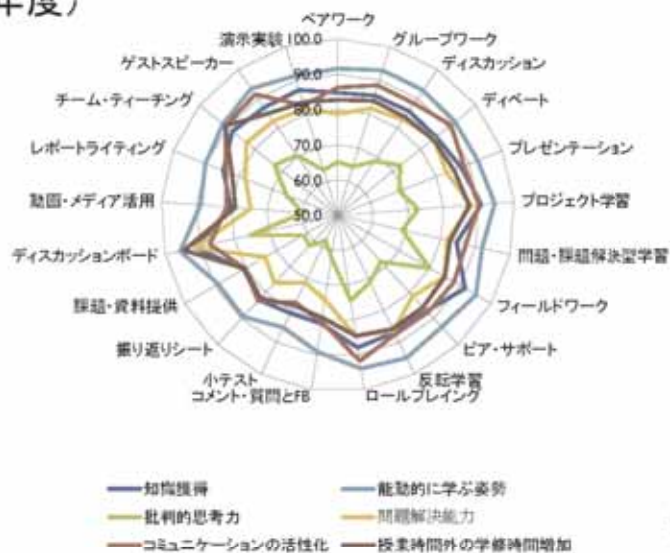
アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査結果

- 各手法・工夫を実施した場合に変化が感じられた割合 (平成27年度)



アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査結果

- 各手法・工夫を実施した場合に変化が感じられた割合
(平成28年度)



▶ 19

Tamagawa University

アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査結果

- 各手法・工夫を実施した場合に変化が感じられた割合
(平成27年度 TOP5)

学生に感じられた変化	1位	2位	3位	4位	5位
知識獲得	ディベート	フィールドワーク	ディスカッション ボード	ロールプレイング	反転学習
能動的に学ぶ姿勢	ディスカッション ボード/反転学習		ディベート	プロジェクト学習	ロールプレイング
批判的思考力	チーム・ティーチ ング	ディベート	フィールドワーク/ ロールプレイング		問題・課題解決型 学習
問題解決能力	プロジェクト学習	チーム・ティーチ ング	ゲストスピーカー	ディベート	フィールドワーク
コミュニケーションの活性化	反転学習	チーム・ティーチ ング	ディベート	ゲストスピーカー	プロジェクト学習
授業時間外の学修時間増加	チーム・ティーチ ング	ディベート	ピア・サポート	ロールプレイング	反転学習

▶ 20

Tamagawa University

アクティブ・ラーニングに関する 教員アンケート調査結果

- 各手法・工夫を実施した場合に変化が感じられた割合
(平成28年度 TOP5)

学生に感じられた変化	1位	2位	3位	4位	5位
知識獲得	フィールドワーク	ディスカッション ボード	プロジェクト学習	チーム・ティーチン グ	ロールプレイング
能動的に学ぶ姿勢	ディスカッション ボード	フィールドワーク	反転学習	プロジェクト学習	ロールプレイング
批判的思考力	フィールドワーク	ディスカッション ボード	ロールプレイング	チーム・ティーチン グ/プロジェクト学 習	
問題解決能力	ディスカッション ボード	プロジェクト学習	反転学習	フィールドワーク/ ディベート	
コミュニケーションの活性化	ロールプレイング	ゲストスピーカー	ディベート	チーム・ティーチン グ	プロジェクト学習
授業時間外の学修時間増加	ディスカッション ボード	チーム・ティーチン グ	プロジェクト学習	反転学習	ピア・サポート

ティーチング・ポートフォリオの導入

■ 目的

- アクティブ・ラーニングを実施した科目の内容・手法・省察等を記録し、教員間の情報共有と授業改善に役立てる手段として導入する。

■ 内容

- 平成26年度および平成27年度においては、ティーチング・ポートフォリオ（以下TP）の仕様の検討と電子TPの開発を開始。その際に、国際的通用性のあるシステムを構築する観点から、先行している米国・カナダの大学の実態調査を実施。

ティーチング・ポートフォリオの導入

■ 入力する10項目

- ①教育上の責務（担当・科目等）
- ②教育上の理念と目的
- ③教育方法
- ④授業科目に関連した教材開発
- ⑤学生の授業評価
- ⑥学生の学修成果
- ⑦授業改善の活動
- ⑧教育力向上のための取り組み
- ⑨特筆すべき教育上の取り組み
- ⑩今後の目標

ティーチング・ポートフォリオの導入

■ 導入にあたっての対応

- 学内における利用拡大に向け、そのステップを検討し、メンターの養成を開始
- メンター（TPを作成する教員を支援する教員）
 - TPを効果的に活用するためには、TP作成のプロセスに関わるメンターの役割が重要なことが分かった。
 - 自問自答しているメンティー（TPを作成する教員）に対しての助言等が重要。

ティーチング・ポートフォリオの導入

■ 成果

- 国内のTP研究者数名にヒアリングを行い、効果的なTPの運用方法を確認することができた。
- 平成27年度に学外のTPワークショップに教員2名を派遣し、メンターとして認定を受けることができた。
- 平成28年度に学内で2名のメンターと外部のスーパーバイザーを中心に、初めてTPの研修会を開催し、さらに10名のメンターを育成することができた。（最終的には各学科にメンターを1名、計17名配置する予定）

ティーチング・ポートフォリオの導入

■ 成果（メンティーの感想）

- やってみて、自分でも驚くほど効果があった。以前より確実に自分がパワーアップしたように感じる。
 - 必要な仕事とそうでない仕事を区別し、切り捨てることができるようになった（時間が作りやすくなった）。
 - 学生に対し、マニュアル的な対応ではなく、以前より柔軟に個性を見て個別対応ができるようになった。
 - すべきことが明確になり、授業方針を立てやすくなった。
- メンターが新たな気づきや方向性を示してくれたので、自分の頭を整理することができた。
- 対話によって考えがまとめられたので良かった。

Outline

1. 本学の取り組みの概要
2. アクティブ・ラーニングの推進
3. 学修成果の可視化
4. 今後の展望

本学における学士力の策定と修得状況の把握

■ 学士力（授業を通して修得できる力）

知識・理解	汎用的能力	態度・志向性
<ul style="list-style-type: none">• 多文化・異文化に関する知識の理解• 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	<ul style="list-style-type: none">• 問題解決力• コミュニケーション・スキル（読む、書く、話す、聴く）• 数量的スキル• 情報リテラシー• 論理的思考力	<ul style="list-style-type: none">• 自己管理能力• チームワーク• リーダーシップ• 倫理観• 市民としての社会的責任• 生涯学習力

カリキュラムマップ

工学部マネジメントサイエンス学科 教育課程表

● 必修科目 ● 必修選択科目 〇 選択科目 □ 特許取得科目 ☆ 履修条件 (注) ① 履修順序

工学部マネジメントサイエンス学科 教育課程表

必修科目 ● 必修選択科目 〇 選択科目 □ 特許取得科目 ☆ 履修条件 (注) ① 履修順序

コース 履修科目 単位 履修科目 単位 履修科目 単位 履修科目 単位 履修科目 単位

履修年次 履修学期 履修科目 単位

履修年次 履修学期 履修科目 単位

履修年次 履修学期 履修科目 単位

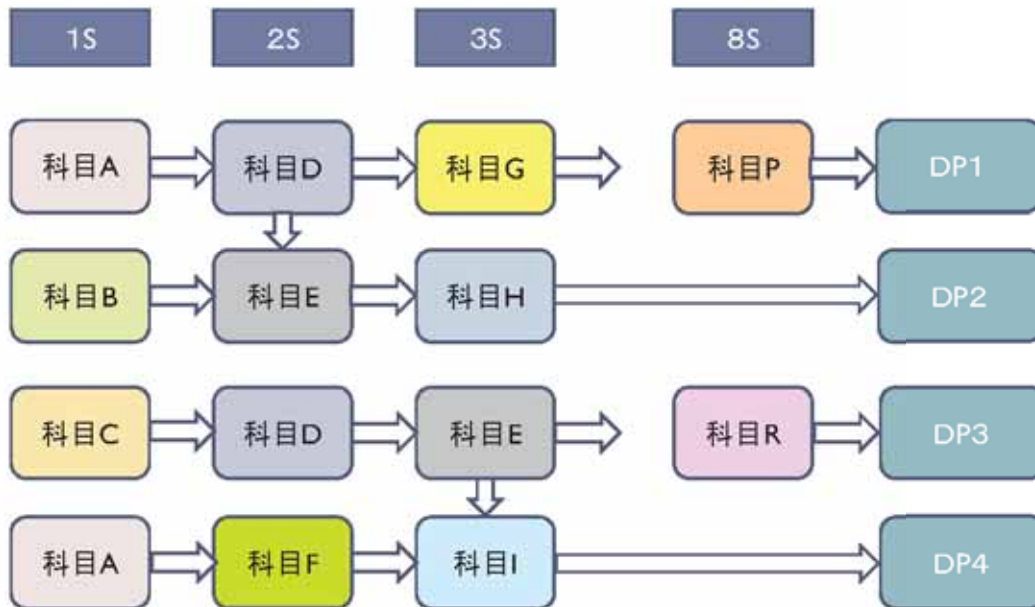
履修年次 履修学期 履修科目 単位

シラバスとの連動

表1-1-1 (Course Outline)

授業を通して修得できる力 (Competency Gain)		
知識・理解の観点 Knowledge and Understanding	多文化・異文化に関する知識の理解 Multiple Culture / Different Culture 人類の文化・社会と自然に関する知識の理解 Human Culture / Society / Nature	○
汎用的技能の観点 Generic Skills	コミュニケーションスキル Reading / Writing / Speaking / Listening 数式的スキル Mathematics 情報リテラシー Information Literacy 論理的思考力 Logical Thinking / Creative Thinking 問題解決力 Problem Solving	
態度・志向性の観点 Personal Qualities	自己管理能力 Self-management チームワーク Teamwork リーダーシップ Leadership 倫理観 Ethical Sense 市民としての社会的責任 Social Responsibility 生涯学習力 Lifelong Learning	○ ○
到達目標 (Objectives)		

DPを達成するための力



▶ 31

Tamagawa University

学生による授業の振り返り (学生ポートフォリオ)

2015年 秋学期 1年
 科目担当者: [編集] [削除]
 科目名: 一年次必修 102
 曜日時限: 全曜日 全曜日

科目評価
 ※入力にあたり、右記の記号は使用できません。< > | " *
 ※スマートフォンからの入力是不具合が生じる可能性があるため、PCから入力するようお願いします。

汎用的技能
 3つの活動においても職業生活や社会生活においても必要な技能を身につけている。 評価凡例: 5:秀 A:優 B:良 C:可 F:不

項目	評価
コミュニケーションスキル 日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。	<input type="radio"/> 5 <input type="radio"/> A <input type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> F

態度・志向性
 積極的な態度や明確な目標を持って行動している。 評価凡例: 5:秀 A:優 B:良 C:可 F:不

項目	評価
チームワーク 他者に協同、協働して行動できる。	<input type="radio"/> 5 <input type="radio"/> A <input type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> F
リーダーシップ 他者に方向性を示し、目標の実現のために行動できる。	<input type="radio"/> 5 <input type="radio"/> A <input type="radio"/> B <input type="radio"/> C <input type="radio"/> F

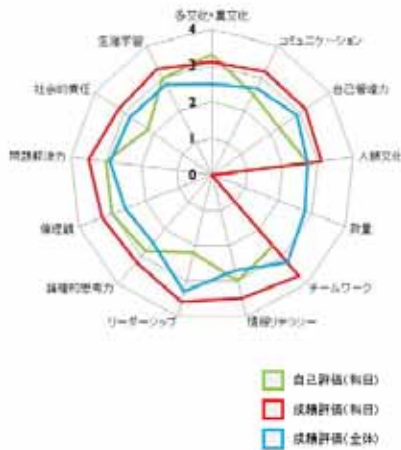
学生コメント

▶ 32

Tamagawa University

学修成果 (成績評価レーダーチャート)

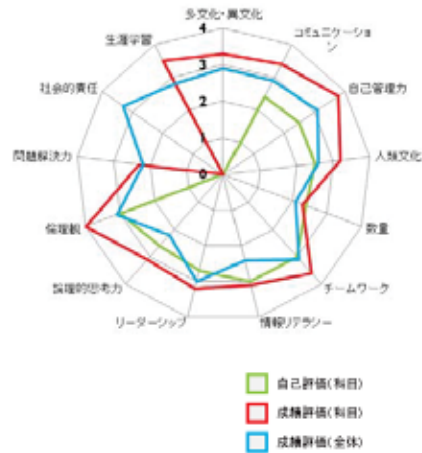
文系学部レーダーチャート



学士力	授業を通して修得できる力	自己評価(科目)	成績評価(個人)	成績評価(全体)
知識・理解	多文化・異文化に関する知識の理解	3.3	3.1	2.5
	人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	2.7	3.1	2.7
汎用的技能	コミュニケーション・スキル	2.5	3.2	2.7
	数量的スキル	0.0	0.0	2.8
	情報リテラシー	3.0	3.5	2.7
	論理的思考力	2.8	3.2	2.5
	問題解決力	3.0	3.5	2.9
態度・志向性	自己管理能力	2.3	3.2	2.9
	チームワーク	2.6	3.7	3.2
	リーダーシップ	2.2	3.6	3.3
	倫理観	3.0	3.3	2.6
	市民としての社会的責任	2.2	3.2	2.8
	生涯学習力	3.0	3.3	2.8

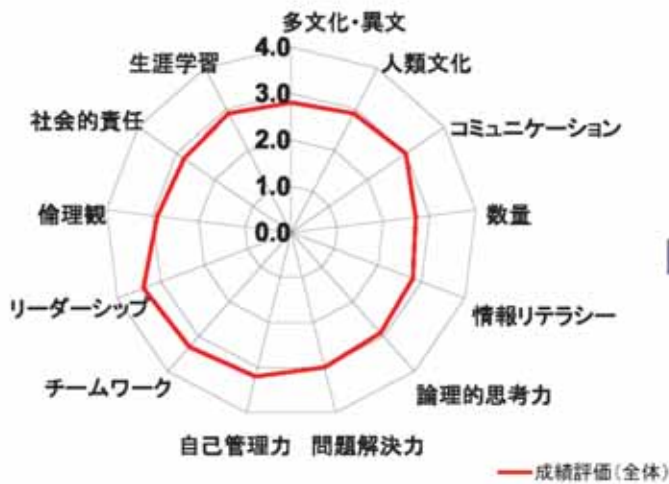
学修成果 (成績評価レーダーチャート)

理系学部レーダーチャート



学士力	授業を通して修得できる力	自己評価(科目)	成績評価(個人)	成績評価(全体)
知識・理解	多文化・異文化に関する知識の理解	0.0	3.3	2.9
	人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	2.5	3.2	2.6
汎用的技能	コミュニケーション・スキル	2.4	3.4	2.9
	数量的スキル	2.4	2.3	2.1
	情報リテラシー	3.0	3.1	2.4
	論理的思考力	2.6	3.1	2.2
	問題解決力	0.0	2.3	2.2
態度・志向性	自己管理能力	2.5	3.8	3.1
	チームワーク	3.0	3.6	3.1
	リーダーシップ	2.7	3.2	3.0
	倫理観	3.0	4.0	3.1
	市民としての社会的責任	0.0	0.0	3.3
	生涯学習力	3.0	3.5	2.8

平成25年度入学生（現4年生）の コンピテンシー修得状況

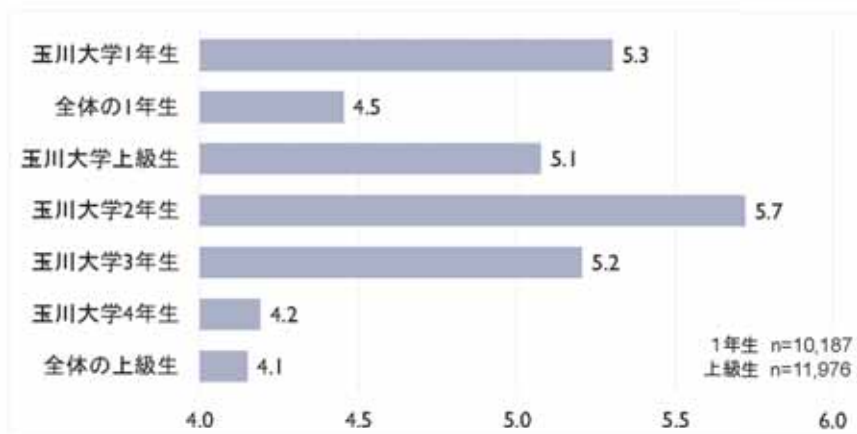


- ・カリキュラムを改訂する際の参考データ
- ・学修成果の可視化に活用

学生調査による学修成果の把握

■ 大学IRコンソーシアム学生調査

週あたりの活動時間：授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする(学年別平均時間：2014年度調査)



学生調査による学修成果の把握

■ 授業外学修時間（2013年度～2015年度の比較）

週あたりの活動時間：授業時間以外に、
授業課題や準備学習、復習をする
(学年別平均時間)



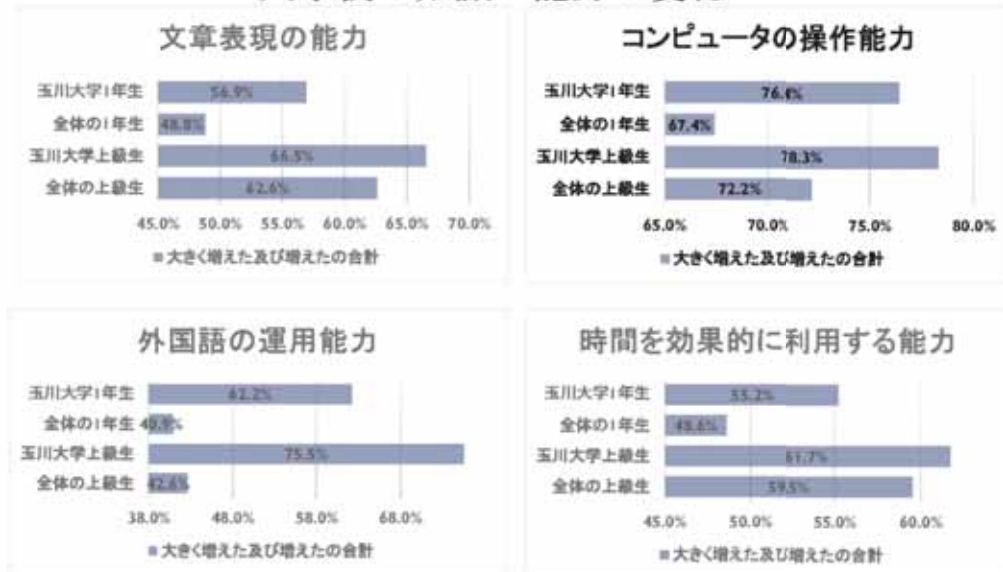
大学IRコンソーシアム学生調査

▶ 37

Tamagawa University

学生調査による学修成果の把握

入学後の知識・能力の変化



1年生 n=10,187 上級生 n=11,976

2014年度大学IRコンソーシアム学生調査

▶ 38

Tamagawa University

学生調査による学修成果の把握

入学後の知識・能力の変化



1年生 n=10,167 上級生 n=11,976 2014年度大学IRコンソーシアム学生調査



- ・2016年度入学生からUS科目（University Standard 科目：一般教養科目）の履修条件見直しを検討
- ・現状ではUS科目の修得必要単位数が学部任せになっている

日本語プレースメントテストの実施

■ 目的

- アクティブ・ラーニングによる学修の成果を高めるためには、学生の基礎学力を把握する必要がある。このことから、大学1年次生に対し、日本語についてのプレースメントテストを行う。

■ 内容

- 朝日新聞社・ベネッセ共催「語彙・読解力検定」6月検定にて、大学1年次生全員を受検させた。受検級は、大学入学時（高校卒業時）の日本語力を測定することを目的とすることから準2級を基本とし、既に当該級を取得している学生については直近上位級を受検するものとした。
- なお、本学では日本語のコミュニケーションの基本は語彙力と理解力にあると考えている。このことから当該検定を受検することとした。

日本語プレースメントテストの実施

■ 成果（今後の展開を含む）

- 「語彙・読解力検定」今年度第1回（6月18日・土）に団体受検として実施した。受検者数は、準2級 1,766名、2級 30名、準1級 4名、合計 1,800名（欠席者127名は含まない）。合格者数は、準2級 969名、2級 5名、準1級 1名。合計1,003名の学生が準2級以上に合格した（既取得36名を含む）。
- このことから、今年度入学生においては約半数、52.0%の学生が大学入試レベル（※）の日本語力を有していることがわかった。この結果を受け、各学部において対応策を検討することとしている。
 - 準1級 社会人に必要なレベルの語彙力・読解力
 - 2級 高校卒業～大学レベルの語彙力・読解力
 - 準2級 高校～大学入試レベルの語彙力・読解力

ジェネリック・スキル測定テストの実施

■ 目的

- 本学が定めている学士力の獲得状況を確認するため、客観的に評価できるとされる外部ジェネリックスキル測定テストの結果をベンチマークとして活用する。

■ 内容

- 平成27年度より、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した「PROG (Progress Report On Generic) テスト」を全学部の3年生に受験させている。平成28年度は、平成28年11月～平成29年1月にかけて実施し、361名が受験した。
- ジェネリックスキルを「コンピテンシー」と「リテラシー」に大別し、具体的には対人基礎力・対自己基礎力・対課題基礎力といった行動実践力、そして情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力といった知識活用力について、現在社会で活躍しているリーダークラスのデータと比較し、客観的に測定するものである。

学修支援の強化

■ 目的

- ラーニング・コモンズにおける学修支援教員を配置することで、教員が授業で行うアクティブ・ラーニングの有効性を高め、同時に学生の学修に対する積極性を活かし、意欲的な学修を支援する。また、学生を主体的な学びへと方向づけることができる。

■ 内容

- ラーニング・コモンズ内に学修支援のためのサポート・デスクを設け、アカデミック・スキルズのサポートを行う専任教員2名、非常勤教員2名、事務補佐員4名を配置し対応している。

学修支援の強化

■ 成果（今後の展開を含む）

- 昨年度はサポート・デスクの認知度が低い状況にあったことから、今年度は学期ごとに「SUPPORT DESK NEWS LETTER」（計2号）を発刊し、大学1年生と教員を中心に配付した。これにより学生の認知度が向上しただけでなく、教員の認知度も上がり、授業の中でラーニング・コモンズの活用を呼びかける教員も増えた。

■ 年間（平成29年2月まで）の相談件数

	アカデミック・スキルズ	英語	会計学	IT	TA	合計
件数	646	72	293	198	93	1,302

学修支援の強化

学修支援セミナー
“レポート”を学ぼう!

どうして学修でもゴールが見えなかった。すでにレポート課題が出された科目もあるかもしれないけど、そもそも「レポート」とは何だろうって悩んでいる人か? 履修の間に守るべきルールがあることを知ってほしいです。

今年ラーニング・コモンズでは「レポート」を取り扱い、基礎から学修セミナーを開催します。初めてレポートに取り組む人も、もう一度復習をおこなってほしい人も、誰でも参加できます。【履修だけの参加もOK!】もちろん学生としてのサークル参加もOK! 自身の学びにセミナーを活用してください!

テーマ	日にち	曜日	会場
レポートって何だろう?	6/19	金	LC333
レポートとは何かを解説するとともに、レポートの構成について学びます。	6/22	月	LC303
読み手に伝わる文章とは?	6/23	火	LC333
レポートで書かれる文章のつくり、また、読み手に伝わる、わかりやすい文章の作成について学びます。	6/25	木	LC303
「アイディア」ってどう広げたらよいの?	6/26	金	LC333
マインドマップの作成を通して、テーマに対する考えの広げ方を学びます。	6/29	月	LC303
「コピペ」と呼ばれないレポートとは?	6/30	火	LC303
引用と転載のようせつについて学びます。	7/2	木	
参考文献リストってどう書いたらよいの?	7/3	金	LC333
参考文献の調べ、検索、ウェブサイトの確認法について学びます。	7/6	月	
緊急対策——時間がない! せめてこれだけ!——(復)	7月中有難き予定		
(上記内容のオンライン対策 100分)			

開催時間 各回 16:00～16:50(50分) ※途中・見学、各回同内容
 定員 各回 20名
 申し込み 事前申し込み制(3日前まで)、定員に余裕があれば、当日参加可。
 申し込み問い合わせ先 ラーニング・コモンズ4階 サポートデスク

大学での文章作成に必要な言葉を学ぼう!

アカデミック・スキルズ
「文章に慣れよう」入門講座

書き言葉 を使おう 編
 大学での学修で求められる書き言葉を学びます
 5/26(木)・30(月)
 ※各日の内容は同じ

見出し をつけよう 編
 文章の要点をおさえて見出しをつけることを学びます
 6/2(木)・3(金)
 ※各日の内容は同じ

●事前**申込は不要**
 ●時間:13:40-14:10(30分)
 ●場所:大学教育棟2014
 ラーニング・コモンズ3階
Round Table
 333/334

●お問い合わせ:
 ラーニング・コモンズ4階
サポート・デスク

対象
**全学部
 全学年**

学修成果の確認と指導 (担任と学生との面談)

- 目的
 - 学修成果を把握し、学修プロセスや能力に応じた指導を実施する。
- 内容
 - 授業外の学修時間の確認
 - 学修効果が高かった学修方法／うまくいかなかった学修方法／今後やろうと考えている学修方法など
- 成果
 - 在学生のうち46.3% (67.3%) *の面談記録が入力された
 - 面談の実施を通じて、担任教員は学生ごとにどのような課題があるかを把握して指導にあたる意識をもつようになった。

*は平成27年度の数値

Outline

1. 本学の取り組みの概要
2. アクティブ・ラーニングの推進
3. 学修成果の可視化
- 4. 課題**

4. 課題

- 授業外学修時間の確保
 - 単位制度の趣旨の理解と実質化
- ルーブリックによる評価
 - パフォーマンス評価の実質化
- 学修成果の測定と可視化
 - 客観的なデータに基づいた学修成果の把握
- 卒業生の状況把握
 - アンケート回収率の向上

H29.3.24

於：玉川大学APシンポジウム

茨城大学における教育の質保証

－卒業時の質を担保するための仕組みづくり－

茨城大学 全学教育機構
蔦田 敏行

はじめに

2

- 茨城大学における卒業時の質保証は、教育の質保証システムの構築とIRによる支援を主眼に置いている。
- これらの取り組みの現状と課題について「4階層質保証システム」、「学修成果の可視化」、「地域との協働による質の向上」という3つのキーワードで説明したい。

茨城大学について

3

- 昭和24年に設置。
- 5学部4研究科。学部は人文学部、教育学部、理学部（水戸市）、工学部（日立市）、農学部（阿見町）。
- 学部学生7,012名、大学院生1,132名。（H28.5.1現在）
- 役員7名、大学教員544名、附属学校教員88名、職員288名（常勤のみ：H28.5.1現在）



AP事業の特徴

4

- **卒業時の質保証は、教育の質保証システムを構築し、運用すること**
 - ディプロマ・サプリメントや到達度テストを作成している大学もあるが、本学の場合、「システム（仕組み）」の構築
 - 卒業研究を総合的な学習と捉え、その学修成果をルーブリックで評価・把握
- **IR機能を活用**
 - 平成17年（2005年）設置のIRオフィスが支援。

AP事業の特徴

- **既存の自己点検評価体制を活用**
 - 各学部は6年ごとに外部評価を実施。
 - 教育プログラム単位での自律的改善活動は、学科会議などに情報提供を行いFDを実施してもらうことで対応。
 - 学位プログラム単位での改善活動は、学部の教育改善担当の委員会などを活用して実施。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2016

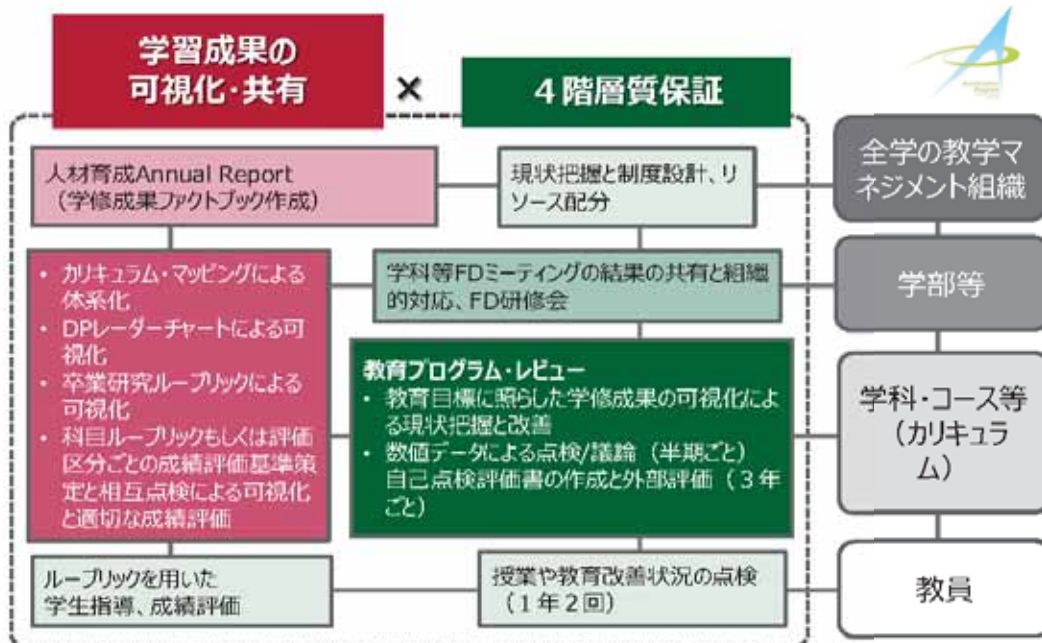
AP事業の特徴

- **学外の方と質を議論する仕組みの構築**
 - 学部ごとにアドバイザリーボードを設置し、以下の3点を担当いただく。
 1. 内部質保証システムの運用状況の点検
 2. ルーブリック等の質を測る「ものさし」を協働して作る。
 3. 学修成果等のデータをご覧いただき、助言をいただく。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2016

教育の質保証システム

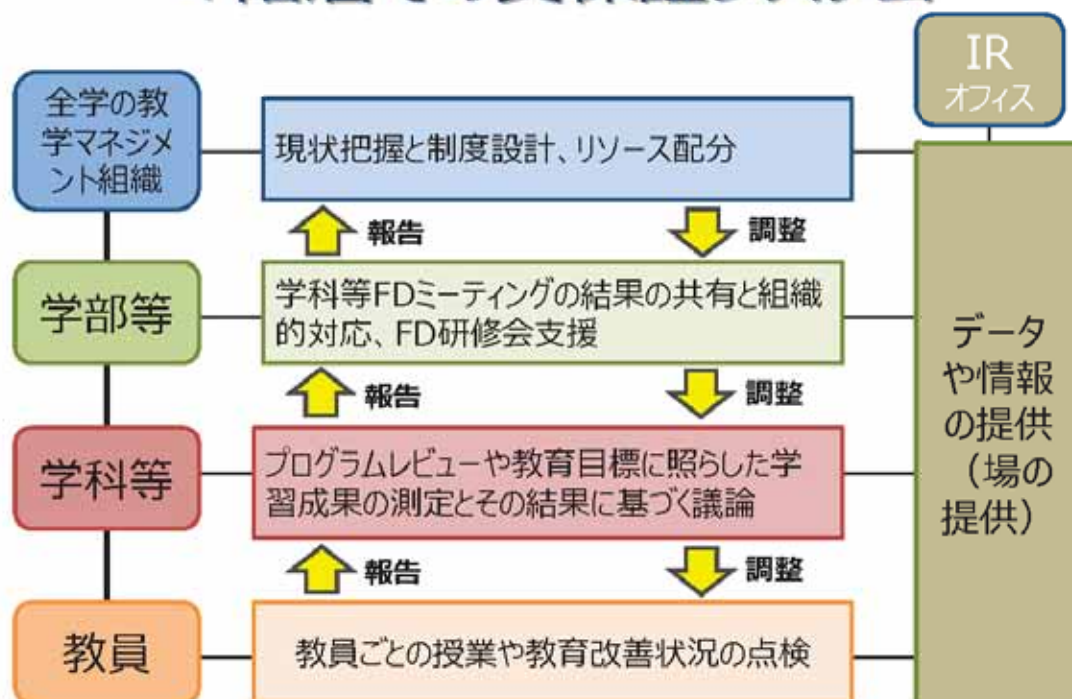
7



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

4階層での質保証システム

8



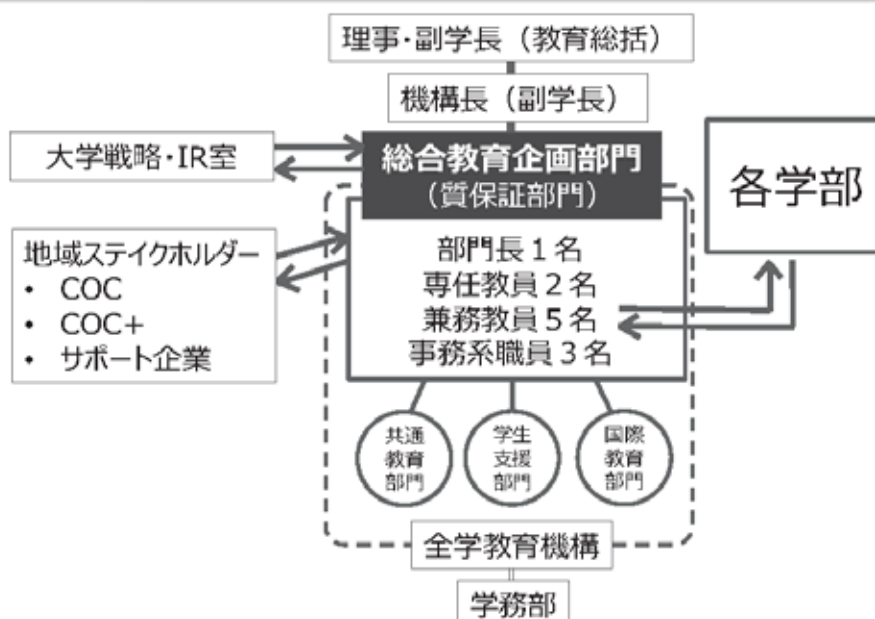
Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

IRオフィスから提供し得る情報



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

質保証部門の組織図



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2016

内部質保証とは

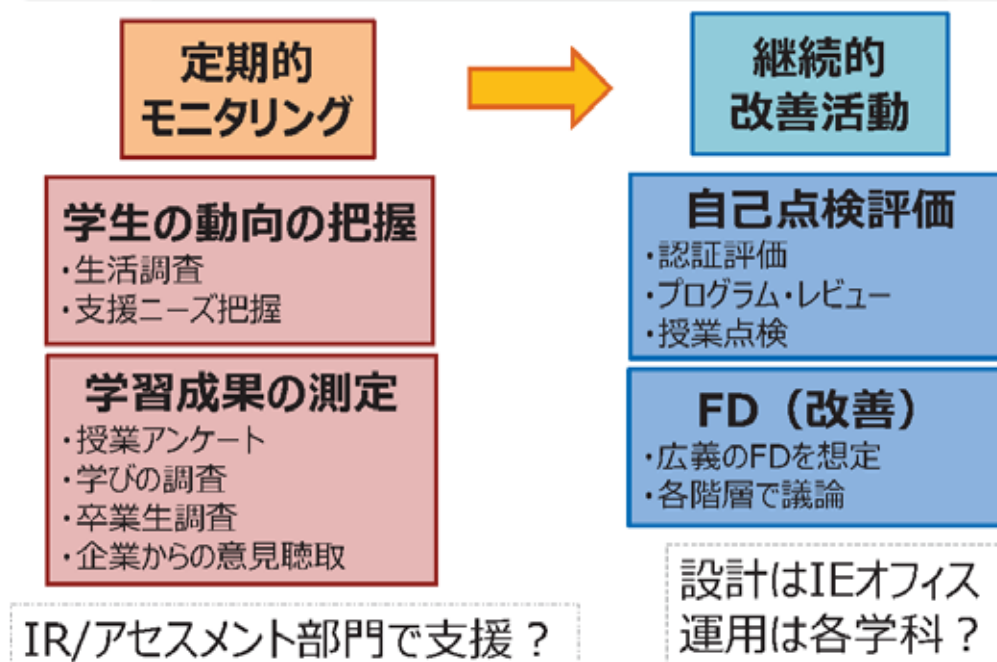
「高等教育機関が、自らの責任で自学の諸活動について点検・評価を行い、その結果をもとに改革・改善に努め、これによって、その質を自ら保証すること」

(大学評価・学位授与機構『高等教育に関する質保証関係用語集第三版』)

- 組織的に継続的な**自己点検評価**（**目標に照らした現状把握**）を実施し、改善を図る。≡ 教学マネジメント体制の構築（→ Institutional Effectiveness）。
- 規則や方針を明確に定め、各階層ごとの質に関する責任と権限を設定する（**アセスメント・ポリシー**等）。
- 簡単に言えば、**自己点検評価とFD**の話。
- IRなどでこれらの取り組みを支援すると効果的？

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

改善を継続的に行うには



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

内部質保証の課題と解決

13

- さまざまな活動は行っており、パーツはかなりある。
- それが体系的、組織的に行われていないのが課題。
↓（本学ではAP事業の支援を受けて改善）
- 自己点検評価（現状把握）のための教育目標（DP）の設定を実施。
- 現場の負荷を上げずに教育改善を進める支援組織（全学教育機構総合教育企画部門）の設置。
- 全国のモデルケースとなるよう情報を他大学へ発信。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

IRとは何か（現場での整理）

14

- IRというのは、Institutional Research の略。
- IR業務とは 1）必要な時に、必要な情報を、必要とする依頼者に提供する業務、2）そのためのデータの情報への変換業務である。（情報の学内流通の円滑化についても職務に含まれると感じている。）
- IRオフィスは「IR業務をより効果的、効率的に行う部署」である（藤原・大野, 2015）。
- 意思決定や判断を行う大学執行部、学部執行部、現場教員等への現状把握のための情報提供を行う。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

情報 [Information]とは何か

- 語源から意味を見してみる。
- **Data** = something given = **自然に得られる事実**
- **Information** = informの名詞 = into + formすること = **判断を形成するために提供される事実**
- データは、情報の形に変換しないと、使いにくい。

(参考) Intelligence = intelligent (=understanding) の名詞 = inter + choose = 選択肢の間の選択をするほどの理解力

(出典) <http://oxforddictionaries.com/>
[NIAD-QE 林隆之教授より]

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

4 階層質保証システム

授業レベルの質保証活動

- 成果の確認
 - 成績データ、授業アンケート結果、授業中の学生の反応等
 - 直接測定ツール（ループブック等）を作る？
- それを受けた改善
 - 授業アンケートによる改善には限界がある。
 - 他の教員による相互レビューも有効だが、上手くやらないと揉めるだけ（紙はあまり使わない、ふんわりがよい）。
 - 授業点検票の作成（自己評価）
 - マンネリ VS. 簡素化（差分チェック）

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

質保証オフィスやIRからの支援

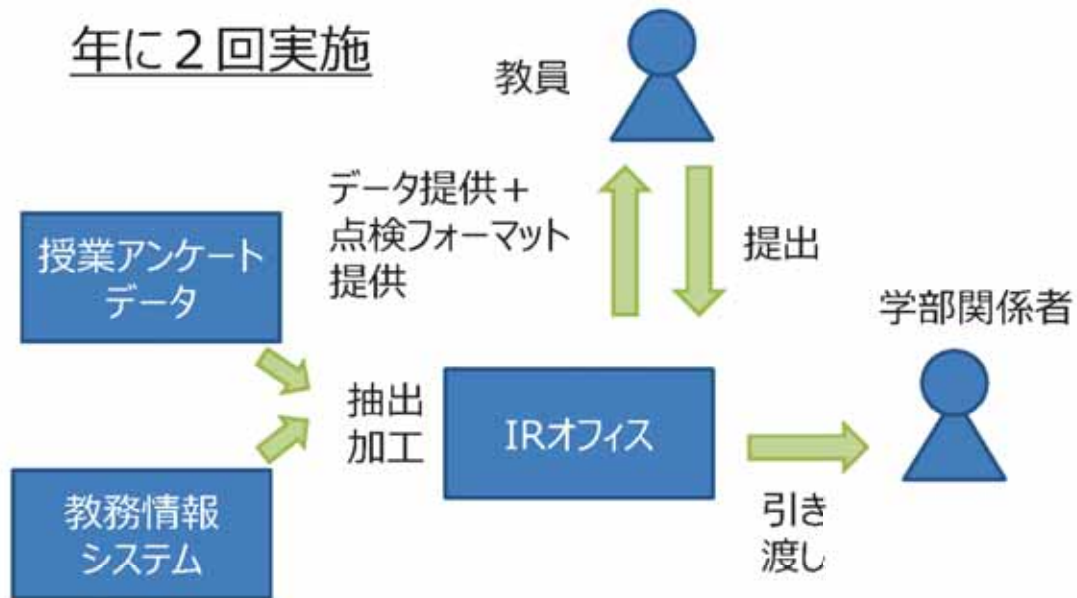
- 教育実施状況の整理と提供
 - 活動をアウトプットベースで適切に把握。
- 成果の測定とデータの提供
 - 成績データ、授業アンケート結果などの整理と提供。
 - さまざまな工夫（可視化、アンケート回収率等）

【課題】

- 正確なデータの収集

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

授業点検の流れ



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

授業点検のためのデータ



授業点検のためのデータ

項目	評価点の分布割合	コメント																
1) 授業中の授業内容、課題について感じられた点とその改善案	今年度より実施の科目である。																	
2) 本年度授業の成績評価分布	<table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> <th>D</th> <th>E</th> <th>欠席</th> <th>止</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>割合</td> <td>14.34%</td> <td>21.29%</td> <td>31.55%</td> <td>23.09%</td> <td>9%</td> <td>1.71%</td> <td>2.3%</td> </tr> </tbody> </table>	区分	A	B	C	D	E	欠席	止	割合	14.34%	21.29%	31.55%	23.09%	9%	1.71%	2.3%	
区分	A	B	C	D	E	欠席	止											
割合	14.34%	21.29%	31.55%	23.09%	9%	1.71%	2.3%											
3) 本年度授業アンケートでの授業の強弱を比較する目的の調査	<table border="1"> <thead> <tr> <th>大まかに区分した評価項目</th> <th>今年度より強</th> <th>今年度より弱</th> <th>今年度より変化なし</th> <th>今年度より強</th> <th>今年度より弱</th> <th>今年度より変化なし</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>割合</td> <td>18.99%</td> <td>36.71%</td> <td>32.97%</td> <td>8.33%</td> <td>8.33%</td> <td>0%</td> </tr> </tbody> </table>	大まかに区分した評価項目	今年度より強	今年度より弱	今年度より変化なし	今年度より強	今年度より弱	今年度より変化なし	割合	18.99%	36.71%	32.97%	8.33%	8.33%	0%			
大まかに区分した評価項目	今年度より強	今年度より弱	今年度より変化なし	今年度より強	今年度より弱	今年度より変化なし												
割合	18.99%	36.71%	32.97%	8.33%	8.33%	0%												
4) 本年度授業アンケート結果の分析によって感じた問題点、および改善案等が示された点	改善案が適切に実施されている。																	
5) 100%問題点について、本年度の授業での改善案	引き続き、今年度の授業の目的にそって実施し、より効果的に行う。																	
6) 学生の意見、アンケート等への対応	対応済み。																	
7) シラバスにアンケートフィードバック結果の導入を促すかについて	<ul style="list-style-type: none"> 授業からAL科目であるが、導入はAL要素を取り入れた。 授業内容が充実し、学生が興味を持ち、積極的に参加している。 導入は今後の授業改善の方向性として、引き続き検討する。 導入は今後の授業改善の方向性として、引き続き検討する。 																	
8) シラバスにアンケートフィードバック結果を記載することでアンケートフィードバック結果の活用が促進されるかについて	<ul style="list-style-type: none"> 今後の授業改善の方向性として、引き続き検討する。 今後の授業改善の方向性として、引き続き検討する。 																	

教育プログラム単位での質保証

- チームで教育を実施する
 - 教育目標 (DP) を明確化 → 指標化できるとよいが、数値になれていないなら、引っ張られるのでほどほどに。
 - 科目群を体系的に配置 → カリキュラムマッピングとシーケンスやカバレッジの確認 (CP) 。
 - APとの関係の整理はなかなか難しい？
- 学習成果の確認
 - 学科、コース等の教育プログラム (教育目標を持つカリキュラムの最小単位) で、自律的に、成績の推移、卒業時調査、卒業後調査、企業等からの意見聴取結果などから、教育目標の達成状況を確認 (学習成果アセスメント) 。

教育プログラム単位での質保証

- 教育活動の確認
 - 授業アンケートの可視化などで活動状況を把握。
- 学生の動向の確認
 - 新入生調査や学生生活実態調査などから学生の動向を把握し、履修指導・生活指導を実施
- それを受けた改善
 - FDミーティングとして、年2回は、チームでこれらの把握をやっ
てもらう。
 - 何かの改善活動をし続けてください。
 - プログラム・レビュー（どこまでやるか？）。
 - 改善計画（エンハンスメント・プラン）をどこまで作るか。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

質保証オフィスやIRからの支援

- 教育目標の達成状況に関連する資料の提供
 - 各種調査の可視化と提供。= 話題・素材の提供
 - ルーブリック策定支援。
- 学生の動向の確認の支援
 - 各種調査の可視化と提供。= 話題・素材の提供
- 改善の枠組みについてのコンサルティング
 - 学科等の事情を踏まえ、必要かつ十分な情報提供。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

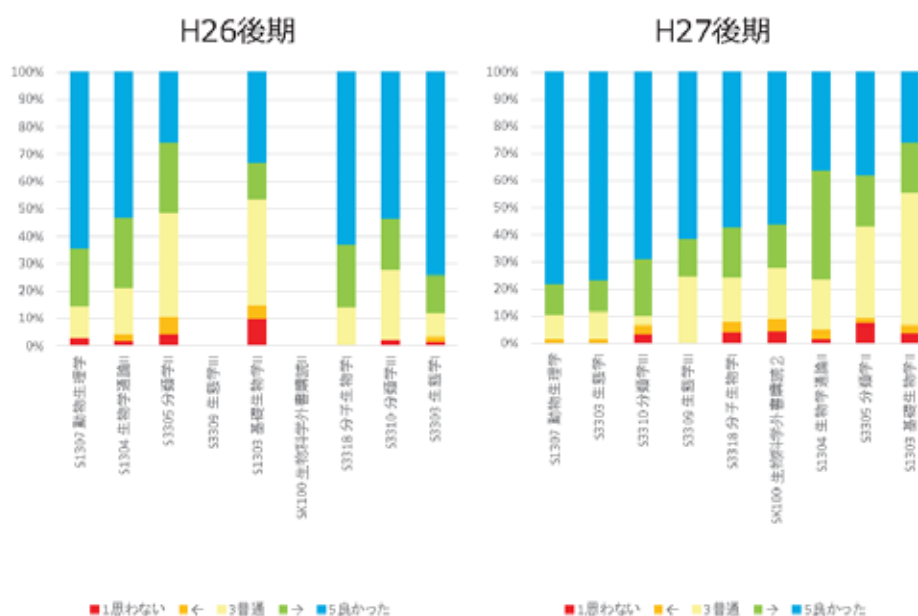
学科等への情報提供例

- 授業アンケート結果の可視化
- 入試区分別の1年前期の成績
- 4年間の成績の推移と就職先
- 4年間のGPAと相関係数が高い科目リスト
- 学籍番号をキーに各種調査結果を連結した分析も実施

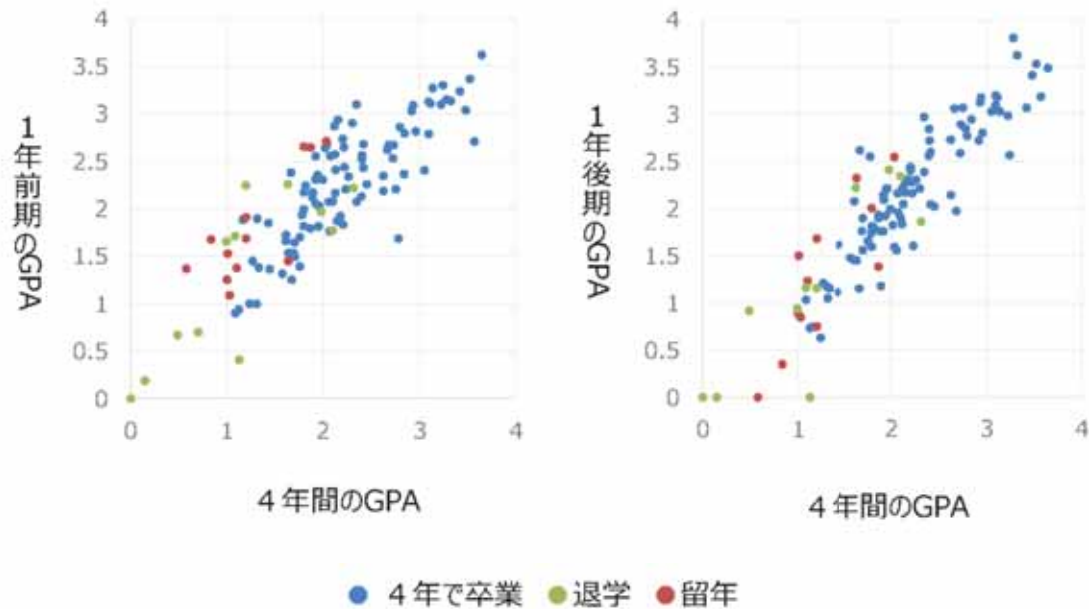
Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

満足度

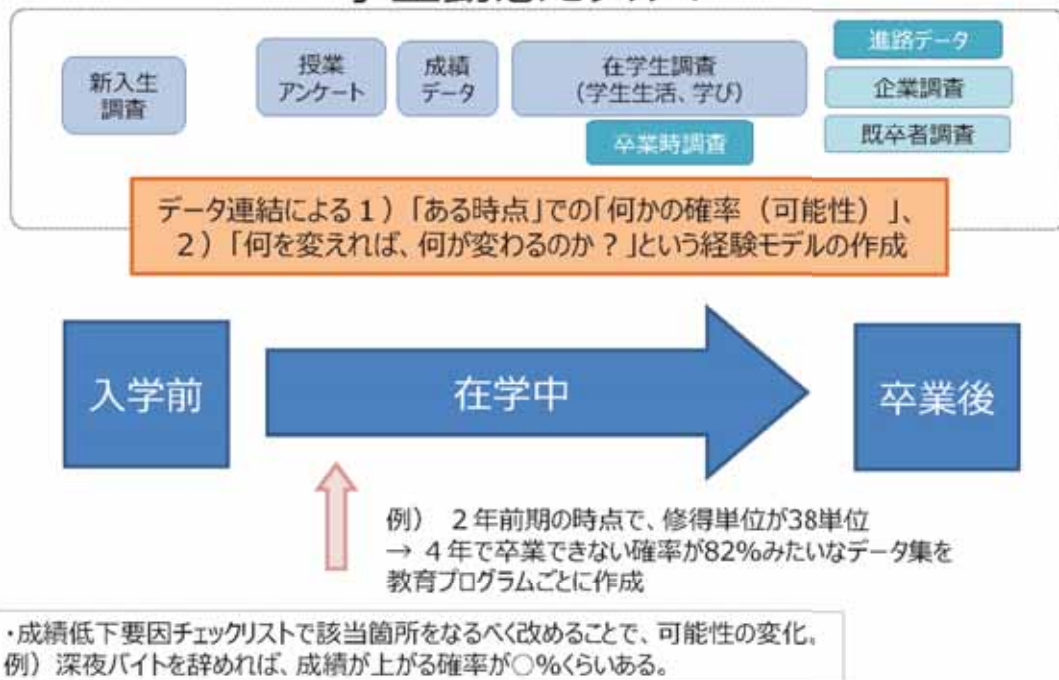
Q1：この科目を履修して良かったと思えましたか？
(1 思わない ← 3 普通 → 5 良かった)



初年次成績と4年間の成績



学生支援の支援を行うための 学生動態モデル？



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

学部レベルの質保証

- 各教育プログラムの改善活動の把握
 - 各教育プログラムの努力では対応できない課題の把握と対応。
 - 認証評価などの際の対応など、各教育プログラムを学位ごとにとりまとめるなどのマネジメント機能の発揮（我が国の場合、学科の力が弱いので、学部で多くの部分を取り仕切ることになるだろう。）
- それを受けた改善
 - 共通的な話題でのFD研修会の実施。
 - 定期的な外部評価の実施（内容は学科単位）

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

各学部への情報提供例

- 学部FDは、全学教育機構総合教育企画部門から講師を派遣。
- 平成28年度実績は以下のとおり。
- 人文学部：学生生活実態調査結果＋成績不振学生の生活実態
- 教育学部：卒業時・終了時調査結果＋授業外学修時間
- 理学部：大学の質保証システム＋卒論着手条件の見なおし＋成績不振学生の生活実態
- 工学部：計画中
- 農学部：農学基礎科目の効果と課題＋学生生活実態調査結果

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

学習成果の測定

間接測定：

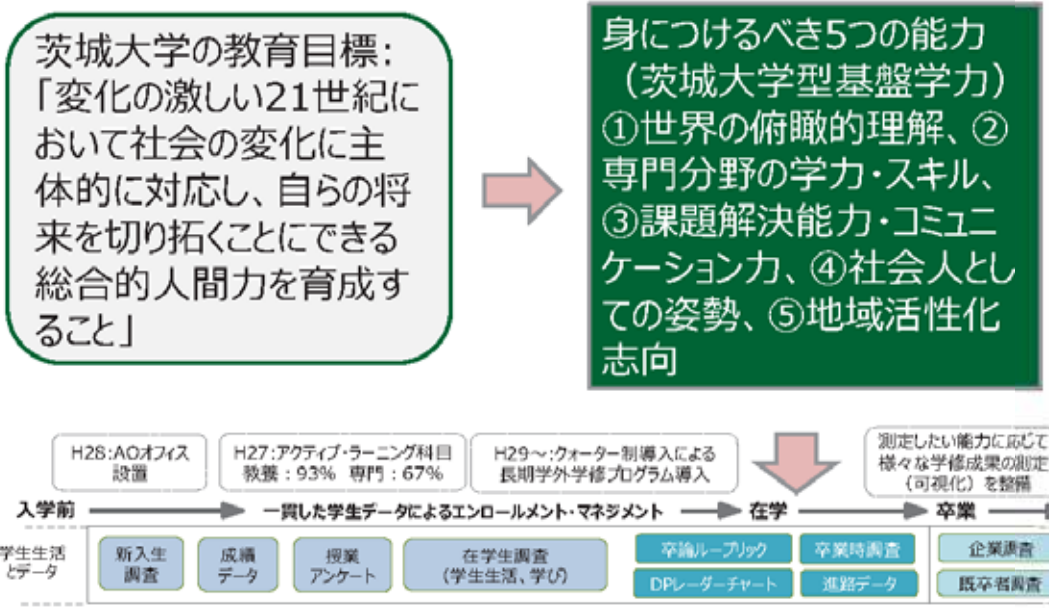
- 新入生調査（志願動機や入学後のインプレッション）
- 学生生活実態調査（新2年生～4年生；生活状況、DP達成状況）
- 卒業時調査（DP達成状況、満足度等）

直接測定：

- 就職先で調査。
- 卒業研究ループリック、主要科目ループリック

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

茨城大学の教育目標



Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

全学のDP（学士課程）

33

（世界の俯瞰的理解）自然環境、国際社会、人間と多様な文化に対する幅広い知識と俯瞰的な理解

（専門分野の学力）専門職業人としての知識・技能および専門分野における十分な見識

（課題解決能力・コミュニケーション力）グローバル化が進む地域や職域において、多様な人々と協働して課題解決していくための思考力・判断力・表現力、および実践的英語能力を含むコミュニケーション力

（社会人としての姿勢）社会の持続的な発展に貢献できる職業人としての意欲と倫理観，主体性

（地域活性化志向）茨城をはじめとする地域の活性化に自ら進んで取り組み、貢献する積極性

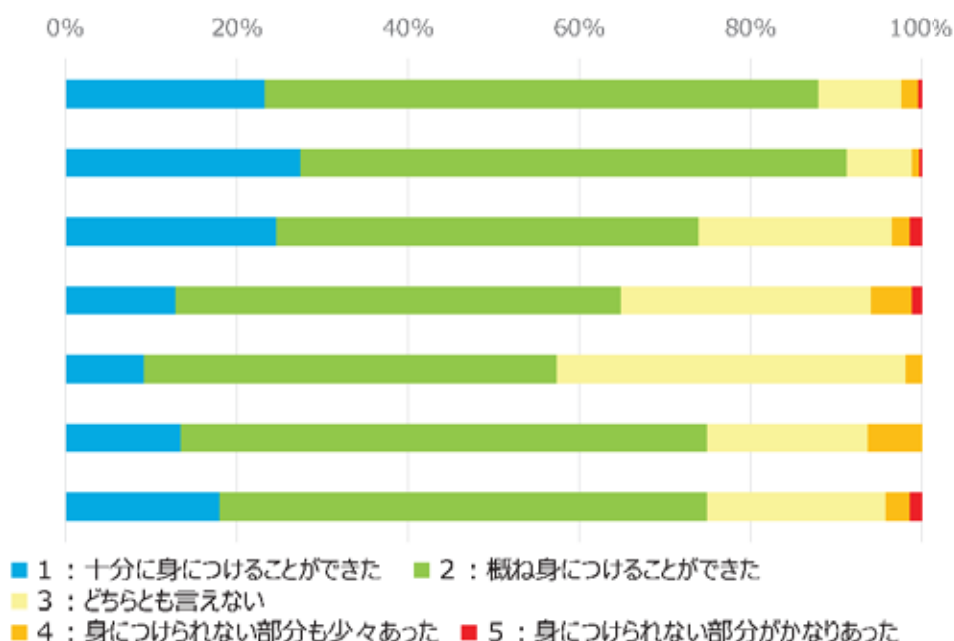
Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

学士

問4：課題解決のための思考力・判断力・表現力が身につきましたか。

34

【工学部設問】 質問6a：論理的思考能力が身についたと思いますか。 質問6b：課題をみつけ解決する能力が身についたと思いますか。



Office of Institutional Research and Planning, Ibaraki Univ. (IIRP), 2016

全学への情報提供例

- 教学マネジメント体制の構築
 - 質保証システムの構築（明文化）。
 - 運用の点検と改善。
- 認証評価など第三者評価対応
 - 法定の評価を実施しつつ、それが「評価のための評価」にならないよう工夫。
- 調査の共通化などの改善
 - 合理化だけでなく合理的な共通化（段階数やよい数値）。
- 制度設計などの見なおしと推進
 - 評価で見えてきた課題や、学部から上がってくる課題を検討

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

全学的な取り組み

- 教員の授業負担調査
- 学生生活実態調査の実施と結果公表
- 新入生調査の共同実施と結果公表
- 卒業生調査の実施
- 企業アンケートの実施
- 卒業時・修了時アンケートの実施と結果公表

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

学修成果の可視化

人材育成Annual Report

38

- **教育関係の主要数値データ等を集約し、学修成果に関するファクトブックを作成する。**
- **中期目標・計画に関連する指標（例：教育内容と関連する就職率、満足度等）、DPに関する指標（課題解決力等）など入口から出口までをカバーする主要数値データの経年変化、学部間比較などを掲載予定。**
- **A4、1枚に収まるダイジェスト版も作成予定。**
- **各学部年報との関係は今後協議する予定。**

DP,CPとカリキュラム・マッピング

- どの科目にDPや教育目標のどの要素が含まれているかの整理（カリキュラム・マッピング）は多くの学部で実施。
- 学修すべき要素を、どの程度学ぶことができたのかについて可視化（レーダーチャート）を行い学生や関係する教員に提供予定（新・教務情報システム）。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

ルーブリックによる学修成果の可視化⁴⁰

- 卒業研究や主要科目についてルーブリックを作成し、学修成果の直接測定と可視化を図る。
- ルーブリックとは、要素ごとに評価水準（それを満たす状況の記述）を定め学修成果を見るもの。

要素/段階	不十分である Not Meeting	到達しつつある Approaching	達成している Meeting	越えている Exceeding
資料の利用			ここに状況の記述が入る。 数値目標があればそれも。	
〇〇に関する知識				
論理構成力				

DPや各学科等の教育目標、(1)知識・技能、(2)思考力・判断力・表現力等の能力、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度などを盛り込みたい。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

ルーブリックの例（大学入門ゼミ）

要素/段階	不十分である： D Not Meeting	到達しつつある： C Approaching	概ね達成している： B Meeting (Mostly) +	達成している： A Meeting	越えている： A+ Exceeding	配点	解説
(第1要素) 自律的な学生生活を行う意欲と主体性	茨城大学での学びの特徴を十分に理解できず、本学学生としての学修姿勢、学生生活の一般的な素養のいづれかが身につけていない。	茨城大学での学びの特徴を概ね理解し、本学学生としての学修姿勢、学生生活の一般的な素養については、十分と言えないまでも必要最低限のレベルでは身につけた。	茨城大学での学びの特徴を概ね理解し、本学学生としての学修姿勢、学生生活の一般的な素養については、一部不安な面はあるが概ねは身につけた。	茨城大学での学びの特徴を理解し、本学学生としての学修姿勢、学生生活の一般的な素養が身につけた。	茨城大学での学びの特徴を理解し、本学学生としての学修姿勢、学生生活の一般的な素養が身につけたことにより、積極的・主体的に学ぶ姿勢が示された。	20	茨城大学での学びの特徴：担任制や相談体制などの支援体制だけでなく、自由にそれを享受する上での責任について理解していること。 本学学生としての学修姿勢：高校との学習の違いを理解し、主体的に学ぶ姿勢を理解していること。 学生生活の一般的な素養：健全な学生生活を送るにあたって必要不可欠な知識、マナー
	d/0	c/1	b/2	a/3	a+/4	3	
(第2要素) 自らの専門分野(学部・学科等)に関する幅広い知識と俯瞰的な理解の基盤	自らの専門分野(学部・学科等)の教育目標や学修の順番(カリキュラムの構造)や学修方法について理解できず、自らの現状を適切に把握できない。	自らの専門分野(学部・学科等)の教育目標や学修の順番(カリキュラムの構造)や学修方法について概ね理解し、初年時の学修に際し、必要最低限の現状把握ができています。	自らの専門分野(学部・学科等)の教育目標や学修の順番(カリキュラムの構造)や学修方法について概ね理解し、自らの現状を概ね把握している。	自らの専門分野(学部・学科等)の教育目標や学修の順番(カリキュラムの構造)や学修方法について理解し、自らの現状を適切に把握している。	自らの専門分野(学部・学科等)の教育目標や学修の順番(カリキュラムの構造)や学修方法について理解し、自らの現状を適切に把握した上で、十分な学習準備を行っている。	20	自らの専門分野の教育目標や学修の順番や学修方法について理解：単にカリキュラム構造を理解するだけでなく、各段階でどのような能力が求められるのかを把握していること。 自らの現状を適切に把握：現段階で十分な能力を持っているのかを把握し、不足があれば自主的に学ぶことを理解していること。
	d/0	c/1	b/2	a/3	a+/4	2	

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

地域との協働による質の向上

地域ステイクホルダーとの連携

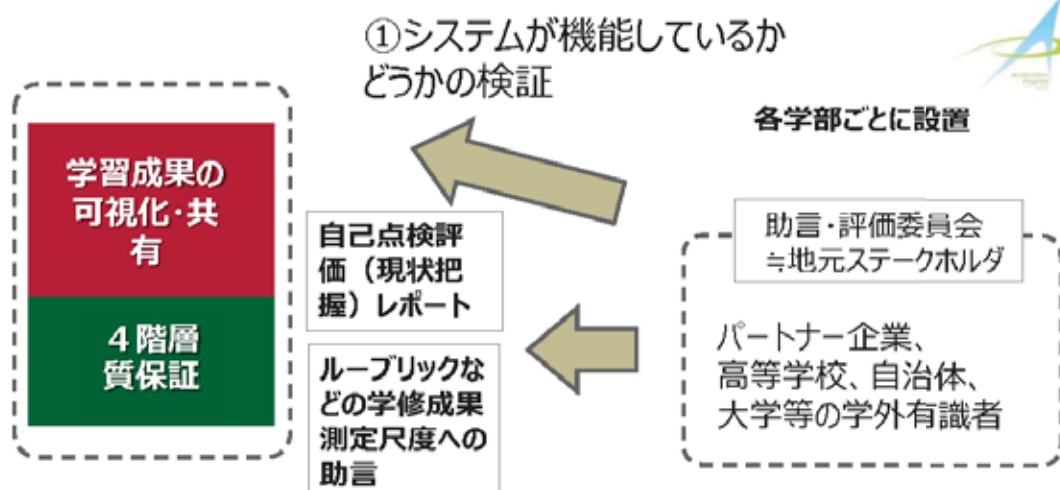
43

- 各学部に地域ステイクホルダーを中心とした**アドバイザーリーボードを設置**いただき、年2回程度助言（要望）をいただく。（予算措置あり）
- 学修成果に関する資料にもとづき**助言**をいただいたり、ルーブリックなどのツールや内部質保証システム全体についてもご**示唆**をいただきたい。
- 資料については、大部分を全学教育機構で準備する予定。

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

学外のみなさまのご協力

44



- ②ルーブリックの内容について助言（茨大の教育の質）
- ③外部評価機能：自己評価の確からしさの確認
ご経歴等、お立場を踏まえた助言

Office of Institutional Effectiveness, Ibaraki Univ. (IEI), 2017

まとめに代えて

- 「質」については、なるべく多くの方が議論に参加することで、ベースラインを引き上げていきたい。
- 性急な改善、改革ではなく、じっくりと日常の中に改善が組み込まれるように進めていきたい。
- どうすれば現場が楽に・楽しく？改善ができるのか。そのためにIRなどの支援部署は何ができるのか。
- 改善の推進者と支援者にとって「必要な情報」を学内で適切に流通させることができるかどうか。